校長室だより～燦燦～ №１６３

社会優先

2020.7.29

緊急事態宣言の発令とともに、様々な自由が制限され、否応なしに「社会」の一員であることを意識させられた。経営学者であり「マネジメント」の発明者でもあるピーター・ドラッカーは、「人間は、生物学的存在として呼吸する空気を必要とするように、社会的、政治的存在として機能する社会を必要とする」と言っている。以下、有識者の話を紹介する。

外出規制、営業規制などコロナ禍によって一定期間、まさに社会の機能が失われ、普段空気のように感じていたものの存在に気づかされた。しかし、緊急事態宣言が解除されても社会の機能が戻ったとは言えない。なぜなら、社会が機能するための最大の条件は、大多数の人が仕事に就いていることだからである。それは単に経済的な不安定さだけの問題ではなく、「社会」への参画という人間の存在意義に関わる問題である。望んでも仕事に就けない社会は人から自己実現の機会を奪う。

コロナ渦の中、マイクロソフトの最高経営責任者サティア・ナデラ氏は、「２年分のデジタル変革が２か月で起きた」と述べている。ツイッター社が在宅勤務を無期限に認めることを決めたように人々の行動様式は変化し、その一部は元には戻らない。もはや４か月前の社会の状況に戻ることはないということである。私たちは、同じような風景に見えても知らないうちに２年ほど時計の針を進めた未来の社会を生きている。コロナ渦により「社会的距離」や「非接触」などの新しい価値観がもたらされた。

ドラッカーは、「日本は、ルネッサンス（再生）の用意はできているか」と言っている。バブル崩壊により失われた１０年の中にいた２０００年頃の日本にかけられた言葉である。残念ながら未だ日本のルネッサンスは成就してはいない。ドラッカーは、明治維新と敗戦という２つの困難を乗り切ってきた日本の社会の力を信じていた。

そして今、東日本大震災の傷も癒えぬうちに襲ってきた新型コロナウイルスという国難も、やはり社会の力で日本は乗り越えなければならない。「日本は、よく知られているように厳格な規律の国であり、全体の意思に個人の意思を合わせる国である」これもドラッカーの言葉である。

日本は、コロナの第一波を強制ではなく要請というレベルで対処し、効果を上げ、世界は驚きをもって受け止めているが、「社会優先の考え方」という強みを発揮した結果ではなかろうか。コロナ渦によって社会優先の考え方が湧き出し、岩盤のように硬直した社会そのものに変化が起こっている。

「今日世界は、近代的であると同時に、際立って非西洋的な文化を必要としている。世界は、ニューヨークまがいやロサンゼルスまがい、あるいはフランクフルトまがいの日本ではなく、日本的な日本を必要としている」これもドラッカーの言葉である。

以上のことから考えてみた。世界の中でも、日本は際立って社会的な絆と力が強い国だと思う。それは「チーム〇〇」などの言葉にも表れている。しかし、今回のコロナ渦においては、どうも日本のよさが出てこない。都道府県という行政単位がよくないのではないか。各都道府県が力を合わせてという気運が高まってこない。挙げ句の果てには、確か７月９日（木）だったと思うが、ある県の知事が「諸悪の根源は東京」と発言してしまった。現状を象徴した出来事である。

東日本大震災の際には、あれほど「絆」という言葉を使ったではないか。今一度、日本のよさに目を向け、日本らしく前に進んでいきたい。